

# メータオ・クリニック支援の会（JAM） 会報メール 第114号 〔2019年6月発行号〕

NPO法人メータオ・クリニック支援の会（JAM）支援者の皆様

いつもご支援していただき、誠にありがとうございます。  
JAM 会報メール第114号をお送りします。

JAM は2008年3月に発足されたNGOです。ビルマ／ミャンマーからタイへ貧困や戦火を逃れてきた人々の病院、メータオ・クリニックの活動を支援する目的で設立されました。

支援者の皆様へ JAM の最新の活動を2カ月に一度、会報メールにて発信いたします。  
今後ともどうぞよろしくお願いたします。

## <目次> [ページ]

2019年スタディーツアー開催中止のお知らせ

新刊：国境の医療者 全国の書店で絶賛発売中！

ミャンマー祭り2019に出展しました！

国内から

編集後記

次号の予定



## 2019年スタディーツアー開催中止のお知らせ

毎年夏に開催しているスタディーツアーですが、今年は現地派遣員不在のため、開催を中止することとなりました。

ご参加を検討いただいていた皆様、楽しみにされていた皆さまに、心よりお詫び申し上げます。

来年度のスタディーツアーは予定が決まり次第、SNS やホームページにてお知らせ致します。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

## 新刊：国境の医療者 全国の書店で絶賛発売中！

メータオ・クリニック支援の会（JAM）は設立10周年を記念して出版いたしました「国境の医療者」は、引き続き絶賛発売中です。

ツイッターやフェイスブックでもご案内しておりますが、5/18の朝日新聞読書面をはじめ、複数のメディアに書評を掲載していただいております。

各々の派遣員が経験した成功体験、面白い発見、悔しい思い、悲しいお話など…さまざまな印象的なエピソードは、読者の皆さんにもきっと共感いただけるものと思います。また、JAMに関わる様々な方から寄せ書き形式でいただいたメッセージも盛り込まれています。さらに、プロの写真家である渋谷敦志さんのご厚意で、素晴らしい写真も本中に散りばめられています。

### ◎『国境の医療者』書店での様子



(※写真はご許可を得て撮影、掲載しております。)

## ミャンマー祭り 2019 に出展しました！

【東京＝池村、白壁】

今年も5月25日（土）、26日（日）の2日間、ミャンマー祭り 2019 に出展しました。JAMの活動や現地派遣員の取り組みに興味を持たれた方や、メータオ・クリニックやタイ・ミ



ヤンマーの国境の情勢に関心のある方々など、様々なバックグラウンドをお持ちの方がブースに足を運んでくださいました。今年の4月に出版された JAM 歴代の現地派遣員の軌跡が綴られた「国境の医療者」の販売も行い、例年以上に大盛況なブースとなりました。

JAM スタッフもブースにお越しくくださった方々と活動をシェアする時間を持つことができ、とても充実した2日間となりました。改めまして、JAM のブースにお越しくくださった皆様、日頃より温かな活動を見守ってくださる皆様、猛暑の中ブースのボランティアをしてくださった皆様とのご縁に心より感謝いたします。

今後も JAM のイベントを企画予定ですのでぜひお気軽にご参加くださいますと幸いです♪



## 国内から

【東京＝田畑 彩生】

皆さん、こんにちは。

平素よりメータオ・クリニック支援の会へ、メータオ・クリニックへ、タイ・ミャンマー国境への継続的なご支援とご注目を頂き誠にありがとうございます。

JAM の事務局長係を 2018 年より担当しております、田畑彩生です。今は、現在勤務しております企業の東南アジア出張の機内より皆様へお手紙をしたためております。宜しく願いいたします。

2012 年 7 月より 2 年間 JAM の現地派遣員として、メータオ・クリニックの地域保健・学校保健部門でボランティア活動に参加させて頂きました。その後 1 年、蚊を媒介とした感染症であるデング熱の地域保健活動を継続する為、国境へ滞在しました。また、タイ王立マヒドン大学で公衆衛生学を学びました。大学院では、ミャンマー/ビルマとタイ国境のウンパン地域にてデング熱の地域調査と生活様式、人々の行動調査などの研究を実施しました。現在、このウンパン地域では、タケダ製薬のデング熱研究助成金を受け、マヒドン大学によるタイにおけるデング熱研究が実施されています。

2019 年 WHO が世界的な 10 の健康を脅かす脅威としてデング熱を取り上げました。6 月 11 日現在のタイ保健省の疫学データには、例年の 5 倍の感染者数と死者数を記録しているとの報告があり、蚊の幼虫駆除活動を防衛省、観光庁、教育省、資源・環境省、内務省などが協働で徹底的に実施する必要があるとの署名と声明を出しました。東南アジア地域では特に、デング熱は地域の大きな健康被害をもたらす疾患なのです。

(引用：バンコクポストより Web

: <https://www.bangkokpost.com/news/general/1695312/dengue-fever-epidemic-declared>)



この1月よりご縁があり、虫よけスプレーなどの虫ケア用品を販売しているアース製薬株式会社、経営統括部門にてCSR・CSV部門を担当させて頂いております。国境で実施していましたが、デング熱の予防地域保健活動にご注目頂きましたのがきっかけとなりました。このCSR・CSVとは、企業の社会的責任(Corporate Social Responsibility=CSR)や「守りと攻めのCSR活動」とも、社会課題から生まれる企業の共通価値創造(Creating Shared Value=CSV)とも解されてまいりました。具体的には、社会貢献活動を始めたCSR活動やSDGsに関連した取り組み。疾病予防の観点から、企業が事業を展開する東南アジア地域にて、社会課題解決の為に健康教育などの事業形成や実施、NPO・NGOなどの団体や行政などとのパートナーシップによる事業を実現する為の部門です。

今までの臨床での経験とは違い、救急部での対応も、注射器も聴診器も持ちませんが、どのように企業とNGO・NPOがタイアップすれば良いか模索できる機会を頂いております。

国境に住んでから常々、「平和と平等無くして、地域が持続的に栄えることも、人々の健康が保たれることもとても難しい。」と感じておりました。タイ・ミャンマー国境の人々に教わったたくさんの事に、これからも向き合える機会を頂いたと感じています。

今回は、私の取り組みの指針となっているSDGsに関連した内容の記事を書かせて頂きます。



SDGsの17のゴールがまとめられた図



SDGsのロゴ

2015年、国連によりSDGs(エスディージーズ:持続可能な開発目標)が採択され、政府機関、行政のみならず、経済活動を実施しているビジネスセクターの責任が大きく問われるようになりました。

このSDGsは、2000年に採択されたMDGs(ミレニアム開発目標)から発展したもので「誰一人として取り残さない。」をスローガンに、17の地球的な課題と169の達成すべき具体的なターゲットが定められた指針です。貧困や母子保健、教育だけではなく、平和や平等、水資源や生態系の豊かさの保持、気候変動への具体的な対策など、地球的課題が幅広く含まれた目標です。これらの目標を学ぶにつれ、この「誰一人として取り残さない」は、本来「にんげんだけでは無い」とも考えるようになりました。

職業柄、昆虫や虫にまつわる記事を読む機会が増え、蜂が地球上から減っているとの中国新聞の特集記事を先日読みました。

目に見える種たちの減少は語られることが増えてきましたが、人知れず絶滅していった目に見えない土壌内の微生物などはどうなのだろうと思ひ、「人知れず」絶滅している世界の生き物も多いであろうと、生態系の一部を担っている小さな微生物や菌類のバランスはどうなのかと興味が湧いております。またマイクロプラスチックや分解されずに水中を漂うゴミたちの存在も、私が小学生のころからの環境問題として取り上げられておりましたが、中国が廃ブ



プラスチックを購入しなくなり、日本でも廃棄物の問題は活発に取り上げられる機会が増えたように感じています。

水も電気もガスもない国境の辺鄙な田舎町に、メータオ・クリニックのスタッフに連れられて訪問した際に、驚くべき光景に唖然とした事を、この様なプラスチックのニュースを見聞きするたびに思い出します。村中に散乱するプラスチックの空き袋、枯れ井戸に捨てられ薄高く見える容器、風に吹かれて舞うプラスチックの薄い袋の数々。村の人に問うと「何故か土に混ぜても土に戻らない、変なもので、こればかり残る。」と。その残ったプラスチックの印字は全てタイ語で書かれた商品でしたが、日本の企業のものもありました。

6月上旬まで、JAMの書籍「国境の医療者」へお写真をご提供頂きました渋谷敦志さんの写真展が六本木で開催されていました。写真展では、「石油が無くても生きていけるが、安全な水が無くてもは、私たちは生きていけない」とのキャプションとお写真を拝見し、ハッと我に返った思いでした。国境で水道施設の無い村を訪問した際の困難な様子へと、一瞬にして大きく揺り戻されたのです。私たちが日本で当たり前の様に享受している水や空気と言う自然環境やインフラの整った世界がいかにか特別な世界であるかという点に、(確かに危ぶまれてはおりますが、)医療に関する皆保険制度もしかり、私たちは様々な制度のもと健康的な毎日を過ごし、安全な生活を営んでいます。

平和でなければ、土地は憎しみと戦いの火に焼かれ、作物は十分育つ事が出来ず、子どもたちが安全に大地を駆け回り、安心出来る場所で、新しい「知識や発見」に出会い、学ぶことは叶いません。感染症や汚染の無い食料や十分な栄養を子どもたちが口に出来る食料は、戦力となる兵士がその口にするモノよりもきっと少なくなることでしょう。身体機能や、臓器を十分に成熟できないまま年を重ねる事となる低栄養の子どもたちの未来に、そんな世界を強制した大人が何を望めるのでしょうか。SDGsはこの様な問いにも向き合う事を求める確かに大きな地球的な課題です。

人間はこの地球上に増え続け、様々な資源を消費し、自然破壊を続けていることも事実です。今の様な発展が「考える」人の存在から生まれるのだとしたら、未来の為に出来る事を「考える」事も出来、行動につなげる事も出来ます。

SDGsに明言された地球的規模の問題を仕事の中で学ぶ機械を頂くにあたり、タイとミャンマーの国境で触れた人々から教わった様々な出来事を思い起こし、自分もこの生態系の一部として、地球上に存在するひとつの生物として、今自分に出来る事を考え行動したいと思うに至るようになりました。まずは、正直小さい事ですマイバックから。そしてゴミをつぶして減量化、省エネから。身近で小さな事から一歩ずつ。国境でも日本でも、世界のどこかでも、一緒に始めませんか？

乱筆長文となり、申し訳ありません。最後までお付き合い頂きありがとうございました。

## 編集後記

ミャンマー祭りでは、お天気も良く、タイミング的にも前週の朝日新聞に書評が掲載されたこともあり、書籍「国境の医療者」への反響はとても大きかったです。多くの方が足を止めてくださり、楽しい2日間でした。(天気がとてもよくて暑くて暑くてとても疲れましたが・・・)

今年は、現地派遣員不在のため、スタディツアーを開催しませんが、書籍に関するイベントを現在、企画しています。詳細が決まりましたら、お知らせしますのでぜひ多くの皆様に



